
アズ・イフ

吉居ゆうき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アズ・イフ

【Nコード】

N1315Q

【作者名】

吉居ゆうき

【あらすじ】

積み上げたマッチ箱が崩れるのは、ひとつひとつの存在の軽さが原因だ。――主人公「僕」が積み上げてきた疎結合な人間関係、そして結婚生活の破綻……。都合の悪い何かから逃れ続けて、あのころがいったいいつかわからなくなる前に、「僕」は記憶していることを、少しずつ書き出してみる。

妻がいなくて何もできない。

僕は本気でそう思っていた。少なくとも半年前まではそうだ。

3年半の結婚生活のなかで、僕は毎日仕事へ出かけて帰ってくるだけの単調な役割を演じるほかに、何か家庭のことをしたという記憶がほとんどない。それはゴミを捨てにいくとか、古くなった電球を交換するとか、観葉植物に水をやるといったような、ほんの些細なことも含めてだ。分業というほど大袈裟なものではなく、夫婦とはそういうものなんだと頭のなかでなんとなく理解して暮らしていた。

結婚するまでの僕は、家のなかのことひと通りはできた。近所のコインランドリーではほぼ毎日洗濯をしていたし、休日は朝から掃除機をかけ、夕方にはスーパ―に出かけて行って材料を買い込み、煮込み料理をつくったり、魚を捌いたりもした。今から考えると、かなり質素で真面目な生活態度だ。学生のころから一人暮らしが長かったから、慣れていたと言えば確かにそういうことになる。

今の僕は、半年前までと比較すると、ずいぶんと変わった。たとえばさっき僕は、小さなミルクパンから沸かしたばかりのミルクティをカップにうつした。そしてハムとレタスのサンドウィッチをナイフで切って、白い皿のうえに見栄え良く積みあげた。洗濯物はドラムのなかで回っているし、クリーニングから戻ったシャツはハンガーケースに吊るしてある。短い結婚生活のなかで、僕は今までたったこれだけのことができなかった。

人間の本質が急激に変化することは、そう多くあるものではない。だから変わったと言うよりは、元に戻ったと言うべきなのかも知れない。結婚で一度はさがった家事に対するモチベーションが、状況の変化に伴ってまたあがったと言い換えてもいい。あるいは、そもそも僕はそういったことが、最初から嫌いではなかったのかも知れ

ない。しかしどう表現するにせよ、僕はこうやって妻がいなくなつた今でも、ひとりでなんとか生きていることは確かだ。境遇が人を変えることの容易さは計り知れない。

たぶん僕はこうやってあと何年か、いや何十年かを過ごしていくだろう。毎日ミルクパンの焦げつきをスポンジでこすったり、抽斗をかき回してクリーニングの引換券を探したりしながら、少しずつ歳をとっていくに違いない。そして何年経ってみたところで、ミルクパンはやはり何度でも焦げつくし、相変わらずクリーニング券は見つからないだろう。

僕は一生のうち、そんな無駄に対して延べ一千時間を費やすかもしれないし、もしかするとそれは一万時間かもしれない。生きていくことは無駄の多い作業だ。

妻とのことを話しはじめる前に、まず僕自身のことについて語っておかなければならないことがたくさんある。僕自身のことと言っても、それは僕という人間の概略のしかもほんの一部に過ぎない。僕という人間の本質のすべてを知ってもらうためには、僕が生きたのと同じ分だけの年月が必要になる。人は――たとえそれが僕のような者であっても、一冊の本に要約してしまえるほど単純な生き物ではない。

しかし語るべきことが山ほどあるなかで、どれを先に説明してどれをあと回しにするべきか、どんな語り口調が適切なのか、実のところ僕にはほとんど見当がついていない。他人に順を追って説明するためには、僕自身がまず、手に入れた真実や失った希望について整理をしなければならないだろう。

過去を整理するための時間というものは、あるようでいて現実的にはそう多くあるものではない。人は限られた未来に対して、やるべきことがあまりにも多すぎる。慌しい毎日のなかで、いつまでも過去にこだわっていたら、おそらく邪魔者扱いを受けるか邪魔者扱いすら受けないかのどちらかだろう。

僕はまだ自分を若いと思っているし、僕自身が誰かから仲間はずれにされることはもちろん避けたい。ただ、いくら過去から目を背けようとしたところで、すでに積み重ねてしまった事実の重みからは逃れられないだろう。そういう意味で、過去にあった様々なことを整理しないまま、いたずらに時間だけを重ねていくよりは、そこに何らかの句読点があったほうが、自分のことを計りやすいに違いない。近ごろそう思うようになった。

「あのころは」ということを人は語りたがるし、思い出したがる。この散文もそうだ。あのころを思い出し、今と比較することは、人間が成長するための一歩だ。都合の悪い何かから逃れ続けて、あのころがいったいどのころかわからなくなる前に、僕は記憶していることを、少しずつ書き出してみようと思う。幸いなことに、まだそれほど過去のことではない。もしそれが簡単な句読点にでもなれば、僕はそこから少しばかり成長した自分を実感できるに違いないから。

去年一年間に僕がバー「ガスライト」に通った回数は、きつと50回は下らないと思う。50回というと、年間の回数としては決して少ない数字ではない。平均するとほぼ週に一度、店の扉を押したことになる。何ごとにも飽きっぽい僕としては、この数字は驚くべきものだ。

マスターはおそらく40代半ばで、いつも清潔な短い髪を七三にして、無表情にシェーカーを振っていた。彼は愛想が良い訳でも悪い訳でもなく、自ら客の話に割り込むことはないかわりに、こちらから話を振ったらそれなりに会話ができる男だ。バーテンとしてはきつと普通なんだと思うけれど、普通のことをできるバーテンは少ない。

「ガスライト」は僕が何年か前にみつけた店だ。目立たない路地の奥にひっそりとあるから、初めて訪れるときはきつとわかりにくいだろう。かく言う僕も、最初はほかの店を探していて偶然迷いこんだのである。けれど、ガス燈の投げている灯りの薄暗さが妙に冒険心を掻きたてるのと、鰻の寝床のような長細い造りがなんだか秘密めいていて、なかなか素敵に落ち着ける空間だ。そのことを発見してから、僕はすっかりこの店の虜になってしまった。

僕は足繁く通うようになってからというもの、この店のカウンターの隅に座って、JBLのスピーカから流れるその日のお薦めナンバーを聴きながら、いつも決まってウシユクベ・リザーブのロックを飲み続けていた。ウシユクベが特別に好きな訳ではないけれど、他人と同じ酒を飲むことが何だか人格を値踏みされるようで嫌だったからだ。

僕は一人のときには、他の誰ともほとんど会話をすることもなく、ただぼんやりとウシユクベを飲んでレーズンを囓んでいることが多かった。グラスはときどきマスターが満たしてくれるし、勘定は目

を向けると指で示してくれる。ときには店に入ってから出るまで何も喋らないこともあった。

一人カウンターに肘をついたままで、僕はいろいろなことを考えた。いろいろなことというのは、文字どおりいろいろなことだ。仕事が進捗していないことへの言い訳を並べてみたり、友人が勧めてくれた書籍のことを思い出してみたり、訳もなく親に反抗していたころのことを悔やんでみたり、学生のころにつき合っていた女の子の顔を思い浮かべることもあった。誰にも邪魔されず、誰の邪魔をもせず、放心できる空間を持つことは素敵なことだ。

あるとき隣りあわせた女性は、僕のそういうスタイルに我慢ができないようだった。彼女はずいぶん前からそこに座っていたらしく、カウンターのうえに顎を乗せて僕の顔を覗き込んだまま、「ねえ、なんでいつも黙ってるの？」と短く訊ねた。

僕はそのとき、サラ・ヴォーンの『ミステイ』に耳を傾けつつ、この房つきのレーズンは、悪くなった葡萄をレーズンにするのか、それとも最初からレーズン用として栽培された葡萄からつくるのか、どっちだろうと考えを巡らせていた。

「あんたのことよ」と彼女は重ねて言った。

僕は突然布団を剥ぎとられた日曜の朝のサラリーマンのように、ひどく不機嫌な目で女を見た。彼女は立てたシャツの襟からエタニティの臭いをぷんぷんさせながら、僕の素敵を突然終わらせた唇に細長い煙草を咥えたところだった。彼女のその煙草の細さが、僕をより一層嫌な気分にした。

「君のような人と話したくないからさ」

僕は頭の中に最初に浮かんだことを口にした。ただしそれはあまり正確な表現ではなかった。

彼女はそれまでもずいぶん飲んでいたらしく、自らコルドンブルの栓を乱暴に抜いて、液体を自分のグラスに注ぐと、濁った目で僕を見据えて口の端を曲げ、いびつな笑いをつくった。

「あんたバカじゃない？」と女は低い声で言った。「クールを気取

つてる男を見ると、吐き気がするわ」

そう言って彼女は煙草を指のあいだに挟んだまま、グラスの液体を半分ほど飲んだ。小さく喉の鳴る音が聞こえた。

「クールを気取る？」

「そう」

「気取った覚えはないな。でもバカというのはたぶん当ってる」

彼女は小さく鼻を鳴らした。

「その言い方がすでに気取ってるわね」

僕は首を傾げた。

JBLの声はそのとき、ちょうどサラ・ヴォーンからヘレン・メリルの『ワッツ・ニュー』に変わったところだった。僕は黒人ヴォーカルの力強さももちろん好きだったが、ヘレン・メリルやジュン・クリステイといった白人女声をより好んで聴いた。なかでもヘレン・メリルのハスキーヴォイスが僕の感覚にぴったりきたので、大学一年の夏などはほぼ毎日のように聴いていた記憶がある。

しかしそのころつき合っていた彼女は、ヘレン・メリルとは正反對で、鼻につくほどの甘い声の持ち主だった。たとえば言うなら、ブロッサム・ディアリーのような。彼女の口癖は「わたしこれ欲しい」だった。彼女は一緒に街を歩くと、ショーウィンドウを覗き込んでほぼ10分おきにその言葉を発していた。僕は少ないアルバイト代を割いて、彼女に山のような贈り物をした。当時の僕は、女の子と交際することが初めてだったので、狭い部屋の片隅で鶏のようにみすばらしいセックスをしては、せっせとバイト代を彼女のアクセサリーに換えていた。

いい加減金を使い果たしたある日、学生食堂の椅子に腰掛けたまま、彼女は意外なほど気だるい声で僕にこう言った。

「好きな人ができたの。仕方ないでしょ？」

何か話さなきゃと思う僕の目をじっと見つめたあと、彼女はそれ以上ひと言も喋らずに去っていった。僕はまるで日曜の夜の古歯ブラシのように、いとも簡単に捨てられてしまったのである。それか

ら彼女には一度も会ってない。

「なるほど」と僕は言った。

「何が？」と女は短く欠伸をした。

「なんでムカついたのか、わかったよ」

「ムカついたのはアタシのほうよ」

「目さ。君の目」

「アタシの目がどうかした？」

「君の目から眉のあたりが、昔の彼女にそっくりなんだ」

「何が言いたいのか？」

女は紅潮した額に血管を浮きたたせて、長い髪を掻きあげた。

「僕はその女性にずっとCDを貸したままになってるんだ。ヘレン・メリル・ウィズ・クリフォード・ブラウン。ほら、今聞こえてる曲の入ったアルバムさ。知ってるだろ？もし別れることになったら、そのときには返すという約束だったのに、その女性はまだ返してくれないんだ。もう10年以上も前のことだけだね」

女はマスカラの長い睫毛をあげて、僕をじっと見た。

「ずいぶんと執念深いよね」

「そうかな」

「そうよ。CDくらい買いなおせばいいじゃない」

「なぜ？」

「高いものじゃないわ」

僕は首を振った。

「借りたまま返さないという行為が嫌なんだ」

「じゃあ、そういう女とつき合ったあんたが悪いってことね」

「だろうね」

女はグラスの中身を一気に飲み干した。僕はアルコールと敵対するような、女性のそういう飲み方が好きではない。これは好みの問題だ。

「君は強いんだね」

「ボトル一本空けても平気よ。今まで潰れたことはないわ。あんた

は？」

「さあね。試したこともないな」

「今から試してみる？」

「また今度にするよ」

「チキン野郎」と女は乾いた調子で笑った。

「充分さ」

「もしかして、あんた童貞？」

「近いね」

「違うわ。女の子とつき合ってたって、さっきそう言ったわ」

「そうかも知れない」

「あんた、絶対にもてないよ」

「僕もそう思う」

「暗いし」

「確かに暗いな」

「嘘つきだし」

「三つの真実にまさるひとつの綺麗な嘘を」

「何それ」

「ラブレーさ。フランソワ・ラブレー」

「女の神経を逆撫するのが得意だし」

「撫でるならもっと別のものがないね」

「顔はちよっと可愛いけど」

「光栄だな」

「ほんのちよっとだけね。口元だけかな」

「すごく似てるって言われる人がいるんだ。誰だと思う？」

女はこめかみに手を当てて、ときどき僕の顔を見ながら、真剣な表情でわりと長い時間考えた。

「誰？ 芸能人？ わからないわ」

降参したように、女は首を横に振った。

「兄貴さ」

僕はそう短く言って、グラスに残っていたウシユクベを飲み干し

た。女はそんなつまらない冗談になぜか大きな声で笑いながら、僕の背中を平手で三度、かなり強く叩いた。女の笑い声にマスターが反応して、グラスを磨きながら心配そうに僕を見た。

「アタシ、ケイコよ。あんた名前は？」

「なぜ訊く？」

「呼びにくいからよ」

「『あんた』で充分さ」

「冷たいのね」

「暗く、嘘つきで、冷たい。そして、もてない」

「最低。チキン以下よ」

女は新しい煙草に火をつけた。

「では、好きなのをどうぞ」と僕は女の顔を見た。

「どういうこと？」

「名前さ。好きな名前を僕につけていいよ。ぴったり来るやつを」

彼女は急いで煙を吐きだすと、まるで南極でサイにでも会ったような目で僕を見た。

「変わった人ね」

僕はレーズンを房から一粒ちぎって噛んだ。

「名前なんてただの符号さ。ホステスの源氏名みたいにね」

彼女は諦めたように溜息を吐くと、またしばらく正面を向いて考え込んだ。

「じゃあ、コウジにするわ」

「いい名前だ」

「昔つき合ってた男の名よ。アタシのことはなんて呼んでくれるの？」

「ケイコでいいさ」

「ダメよ。お互い同じようにしなきゃ」

女は細い指で僕の二の腕を掴んで、揺すった。

「じゃあナツミだ」

「昔つき合ってた女？」

「そう」

「私はちゃんとCD返すわ」

「そうあって欲しいね」

彼女は僕の腕を放すと、意外と真面目な顔をして長い髪を何度か指で梳き、僕の目をじっと見た。

「少し気分を変えようか。お互いの名前も決まったことだしね」

そう言って僕は目はずすと、ソニー・クラークの『クール・ストラッティン』をマスターにリクエストした。

「クール……？」

「クール・ストラッティン」

「どういう意味？」

「つまり、僕のような者のことさ」

「そうなの？」

「君がくれたテーマだよ」

「ナツミよ」

「そうだ。ナツミ」

「コウジはクール・ストラッティンなの？」

「ああ」

「どういう意味？」

「さあね」

「教えてくれてもいいじゃない」

「たぶんだけど、格好つけて歩くって意味なんだろうと思うよ」

ジャッキー・マクリーンの軽快なサックスの音が流れはじめた。

「まだ歩いてないわ」

「そのうち歩くさ」

彼女は少しだけ自分の手の甲を眺め、手のひらを眺め、そして思い出したように僕を見た。

「ねえコウジ、連絡先教えてよ」

僕は彼女の目を覗きこんだ。

「酔ってるんじゃないの？」

「大丈夫よ。ボトル1本飲んでも平気」

彼女はケータイ電話をバッグから取りだしてカウンターのうえに置いた。ピンク色の本体の周囲になにかのシールがいっぱい貼りつけられていて、過剰なほどのストラップの束が重そうにぶら下がっていた。

「ちょっと待ってね、オシッコよ」

彼女はうふっと息を漏らしてそう言っていると、周囲にエタニティの匂いを振りまきながらトイレに立った。マスターはその後ろ姿を目で追ってから、僕の顔を見て口をへの字に曲げてみせた。

僕は声を立てずに笑って支払を済ませると、そのまま無言で店を抜け出した。

風のない夜だった。誰も歩いていない街を、妙に明るい月が静かに照らしていた。僕はその月のしたで『クール・ストラッティン』のリズムを思い浮かべながら、僕の影といっしょに靴音をたてて歩いた。

「ステアさん、こんばんは。今夜は遅いのね」

「うん。ちょっと仕事でね」

「へえ、今まで？ 大変なんだ。ご苦労様」

「大変ってこともないよ、接待なもの」

「でも接待って気を遣うでしょ？ 気疲れとか」

「気なんて遣わない僕は。隣で営業が一生懸命に喋ってるから、それでいいかと」

「気を遣わずに、そのあいだ何をしてるの？」

「べつに何も。食べて飲んで、それだけさ」

「そう？」

「強いて言うならば、キミのこと考えてるかな」

「よく言うよ」

「ホントさ。レイナは今ごろ何してるだろうってね」

「見え透いてるわ」

「そうかな」

「だって、顔も見たことない相手のことを思える？」

「人生は不可解の連続さ」

「知り合ってまだひと月よ？ 不可解すぎるわ」

「時間は問題じゃない。ロミオとジュリエットは、出会った瞬間に恋に落ちた」

「私たちはまだ出会ってもないわ」

「だろう？ そろそろ二人で会ってみたいなく、なんて思わない？」

「ゴメンナサイ。この前言ったと思うけど、私はもう女を捨ててるから」

「捨ててるから？」

「そういう対象として見ないでね」

「25歳で女を捨てるなんて、実際もつたないよね」

「女は結婚するとそうなるものよ。普通はね」

「僕だって結婚してる。お互い公平な立場だ」

「ダブル不倫？」

「よくあることさ」

「そうならないことを祈るわ」

「女を捨てた人がこうやって僕とチャットする？」

「アナタはお友達よ」

「ありえない」

「なぜ？」

「友達はリアルな世界にたくさんいるだろ？」

「ダンナの仕事で今のところへ越して来たから、ほとんどいないの」

「じゃあ友達として会おう」

「別に会わなくても友達でいられるじゃない」

「より親交を深める」

「親交を深めて、それでどうするの？」

「ホテルに行く」

「やだよ」

「ホテルで食事」

「あはは」

「ところで、キミはデパートの何階で働いているんだっけ？」

「ぜひ探してみてよ」

「レイナだけじゃわからないな」

「しかもハンドルネームだからね」

「館内放送で呼び出してもらう」

「なんて？」

「25歳の既婚従業員、レイナさん、一階インフォメーションにイ
ケメンのステアさんお待ちです」

「こっそり顔だけ見にいくわ」

「ヒントをくれないかな」

「ヒント？」

「どのあたりを探せばいい？」

「そうね。絶対に見つかりっこない場所」

「喪服売場」

「ブー。そんなのないよ。フォーマルならあるけど」

「呉服」

「違うわ」

「オートクチュール」

「違う」

「プレタポルテ」

「発想が服から離れられないのね」

「じゃ食品」

「残念。私は事務なのでフロアには出ないの」

「なんだ」

「諦めた？」

「まあいいや。明日一緒にランチしない？　うちのオフィス近所だしさ」

「明日はお休みとってるの、ゴメンネ」

「ダンナとデート？」

「かもね」

「平日に？」

「ダンナも休暇とってる」

「妬けるなあ」

「せいぜい布団のなかで悶々としてください」

「妬きすぎて火事だすかもよ」

「私のせい？」

「もちろん」

「明日はニュースに気をつけておくわ。そろそろ落ちます。目が閉じそうよ」

「うん、今夜もありがとう」

「おやすみ」

「また明日」

テレビでは相変わらず、CNNがひどい乱射事件のレポートを繰り返していた。自殺した犯人はテキサス州の男子高校生だ。僕は聞きとりにくい同時通訳の音声を残したまま、ずっと画面を眺めていた。まだ自分の半分ほどしか生きていない彼に、いったいどんな憤懣があったのか興味を感じたからだ。

今ここで死んでしまった犯人の言い分を、空のマッチ箱のようにどれだけ積み上げたところで、きっと社会の誰もが彼のやったことについて理解しないに違いない。むしろ理解しようとするプロセス自体を、すべての人々が拒む結果になってもおかしくはない。

殺人は卑劣な犯罪だ。

その点については昔も今も揺るぎはない。たとえばそういう視点に立つことのみをもってある人を否定しようと思えば、僕にだって明日からでもできるだろう。

君は卑劣だ。

そのひと言ですべてを言い終えることができる。けれどもその一方で、向こうへ追いやってしまった多くのものについて、僕たちは目を向けなければいけないと思う。

彼はなぜ死を選ばなければならなかったか。

簡単に言うならば、今回の場合はそういうテーマについて考えてみるということだ。

なぜ殺したのかという疑問に比べて、それはあまりにも取りあげられない謎だ。本当は死ななくても良かったのではないかなんてことに、誰も興味はない。それを考えることはもっぱら犯人の遺族に

委ねられ、放置されている。

しかし繰り返し返すけど、そういったことを僕たちも真剣に考えてみることが大切だ。それは犯罪者を擁護するということではなく、彼の行動を分析し、人間があえて破滅を選択することへの対策を考えるということだ。分析と対策は、すなわち僕たちが生きていくための、無駄なルーチンワークのひとつに他ならない。毎日ミルクパンを磨く無駄。クリーニング券を探し続ける無駄。それから他人を分析する無駄。対策を考える無駄だ。

——ではここで質問してみましょう。

——愛する家族が殺されたら、あなたならどうしますか？

「えっと……」とテレビに向かって言いかけて、僕はやっぱり口に出して言うのをやめた。そしてそのかわりに、手に持っていたサンドウィッチをほんの少し齧った。口に出すことで失われていくものがそれほど多くある訳ではないけれど、口に出すことでデフォルメされていくものはたくさんあるかもしれない。

人は弱いものだから——という言い方がもし陳腐に聞こえるならば、僕は自分自身をひどく弱い人間だと思っているから——自分の口にした言葉に自らが縛られていき、歪められていくことを極度に恐れている。

ただしそれは、現在の心境だ。僕は32歳の現在に至るまでのあいだに、きつと世間の何割かの人たちがそうであるように、いくつかのちっぽけな苦渋をなめてきた。妻を失ったこともその一つだ。そしてそれらのことをもって、自分は多少なりとも成長したのだと今のところ考えている。僕が考える成長とは、多くの場合、慎重になるということと同義だ。

さてテレビでは、犯人のクラスメイトの女性がインタビューを受けている。彼女は唇を震わせて早口で喋り、空を仰いで額に手をやっている。その様子を見て僕は、とっさに売れない大部屋女優の三

文芝居を連想した。

「彼はわたしにも銃口を向けてきたわ。そのときの恐ろしさと言ったら！ だからわたしは彼に言ったの。もしその銃でわたしが死ぬことになったら、誰がいちばん悲しむと思う？ それはたぶんあなたよってね。そしたら彼はこう言ったわ。そうかい。ぼくはこれ以上、この社会から悲しみを背負わされるのは御免だね。それなら逆に、こうやって君を悲しませてやるって。そしてその言葉のあとに、彼は自分のこめかみに銃口を向けて……ああ神様。なんてこと！」

彼女は目に涙をうかべて、そんなことを言っていた。そう。涙をうかべてだ。

☆ ☆ ☆

積み上げたマッチ箱が崩れるのは、ひとつひとつの存在の軽さが原因だ。

その日、愛佳は僕の隣で、知らないうちに端が欠けてしまった右手薬指のネイルを少し気にしながら、レッドアイのグラスを傾けていた。彼女にはちょっと変わった特徴があつて、はじめて会ったときから僕は直感的にそれに気づいていた。

「ユウキ君」と愛佳は覚えたばかりの名で僕を呼んだ。彼女は僕より十歳年下のはずだ。

「ユウキ君、ほんとうはたまごから生まれたかったなあ、って思う瞬間ない？」

僕はウシユクベのロックアイスを指でぐるぐる掻きまわしながら、そつと彼女の顔を覗きこんだ。彼女はグロスで濡らしたくちびるをなかば開いたまま、欠けたネイルのところを指でなぞっていた。

「ないけど、なぜ？」

「ちよつと訊いてみたかったの」

彼女は顔をあげて僕と目をあわせると、少し笑った。薄いピンク色のドレスの大きく開いた胸元から見える白い肌が、大人っぽく豊かな影をつくっていた。

「愛佳はあるよ。たまごから生まれたら可愛いじゃん」

「可愛いかな？」

「うん。ピヨピヨってね」

彼女は指で不器用に丸いたまごの形をつくった。そしてその細い人差し指と親指が少し開いて、まるでくちばしのようにピヨピヨと言った。

「愛佳ちゃん、人間はピヨピヨって言わないんだ」

「言うよ。たまごだったら言うもん。ピヨピヨピヨピヨ、ほらね」
彼女のピヨピヨが僕の腕を登ってきて、耳たぶに噛みついた。

「ユウキ君の耳、ここんところ冷たいね」

「愛佳ちゃんは冷たくないの？」

「うん」

「どれどれ？」

僕は愛佳の耳に触れてみた。彼女の耳は暖かった。

「愛佳ちゃん、少し酔ったんじゃない？ 疲れたかな？」

「お仕事、疲れた」

「そろそろ帰ろうか」

もう深夜の二時だ。僕は明朝七時に起きて、出勤の用意をしなくてはいけない。しかも午前の企画会議ではプレゼンテーションをする予定になっていた。

「ユウキ君、帰ったら奥さんに怒られる？」

「怒られないけど、明日も朝から仕事だからね」

「毎日たまごから生まれたら、明日のこと気にする必要ないのに」

「またたまごかい？」

「たまご可愛いもん。ユウキ君はたまご嫌い？」

「嫌いじゃないよ。スクランブルはよく食べる」

「食べちゃだめよ、愛佳が可愛がってるのに」

ゆっくりとそう言いながら、彼女は自分の肩で僕のからだをちょっと押すようにした。彼女は何を話すにしても、概ねにおいてゆっくりとしている。

「どうしてそんなにたまごが好き？」

「悪口言わないから」

「誰の？」

「愛佳の」

「たまごじゃなくても、君の悪口なんか言わないよ」

僕はできるだけ丁寧に言った。

「ううん、みんな愛佳の悪口言うの。おまえはバカだって。消費税の計算もできないくせにって」

彼女は僕の顔を見上げた。濡れたくちびるはガスライトの暗い灯りのしたで、桜色に光っていた。

「そんな連中はほっとけばいい」

「でもね」と愛佳は僕の肩に額をつけて言った。「毎日いじめられるの」

彼女のレッドアイはまだグラスに半分ほど残っていた。

僕は黙ったままウシユクベのグラスの縁を舐めた。

僕たちは半年前に愛佳の働くクラブで知り合い、休日になるとドライブに出かけ、気の利いたイタリア料理店で食事をし、映画を観て、ダーツを投げた。彼女はまだ苗字しか知らない僕に言われるままに会い、言われるままにキスをした。彼女がある偶然から僕のフルネームと妻の存在を知ることになったのはほんの二日前のことだ。「ユウキ君は奥さんと仲良しよね？」

愛佳は僕の肩に額をつけたまま言った。

「ああ」

ほんとうにそうだろうか？——僕は頷いたあとでそう思った。

ありとあらゆる点で、僕と妻は違っていた。しかし違っているということ自体は、それが必ずしも仲の悪さを意味する訳ではない。サラダにかけるドレッシングの種類も、パスタのゆで方も、こまごまとした物の置き場所も、車のデザインも、家具のレイアウトも、ひいきにしているフットボールのチームも、僕たち二人はまるで好みが違った。けれども、それまでの結婚生活で喧嘩をしたことは二度しかなかった。一度目は結婚した共通の友人にどんなお祝いを贈るかということで、二度目は離婚したその友人にどういう慰めの言葉をかけるかということだ。

それとは逆に、お互いに目指す方向はまったく違うのに、行動パターンが同じということがある。同じ映画を見て、同じように笑い同じように泣き、僕はたいそう面白かったと言い、妻はひどくつまらなかったと言う。そんなふうに、何かを得ようとする動作が似ているからと言って、得るべきものが似ているとは限らない。妻が映画を観てそこから得ようとしていたものは、僕の求めるものとは別物だと解釈するほうが自然だった。一般の登山者と山岳救助隊では、山を登るというアプローチについては類似しているけれど、山を登

る目的はまるで違う。たとえばそういうことだ。

「僕と奥さんのことが気になるかい？」

「ユウキ君、愛佳だけじゃなくてみんなに優しいのよね」

彼女は僕の肩につけていた顔をあげて言った。べつに怒っている様子ではなかった。ただ疲れたのか酔ったのか、眸だけは元氣なく伏せたまま両手でゆっくりと僕の手をにぎった。

☆ ☆ ☆

その夜、僕たちはタクシーで曲がりくねった車道を行き止まりまで走り、そこから二人手をつないで丘に登った。真夜中の三時だった。べつに月を見ようと思った訳ではないし、灯りが消えて寝静まった街を眺めてみるつもりもなかった。

「どこか高い場所に連れて行ってほしいの」と愛佳は言った。ただそれだけだ。そこで思いついたのが街の東側にある丘のうえだった。僕たちはとても親切だが饒舌すぎるタクシーを降りてからは、林の中につけられた暗い土の小径を登るあいだ、ずっと黙ったままだった。まるで口を開くことが二人の時間を終わらせることにつながるかのように、お互いに話しかけることをしようとしなかった。

もしかすると愛佳は酔っていたのかもしれない。彼女は乱暴に掴みあげたドレスの裾と脱いだヒールを左手に、右手を僕とつないだまま丘に登った。彼女は歩きながらしばしば呼吸を乱した。そして呼吸が乱れるときには必ず僕とつないでいる右手に力があるようだった。それがほんとうに酔いからくるものなのか、それともただ疲れているだけなのか、僕は自分の左手のひらで感じ取るしかなかった。そしてそれを感じ取ることのできない僕は、自分に対していらだつというよりはもっとずっと冷静な気分で、ただ手をつないでいるだけの自分の滑稽さに呆れたまま足を運んでいた。

およそ20分ほど登ったところでふと重く閉ざされる感じがして見ると、そこには月明かりの空を長方形に切り落としたような展望

台があった。手が加えられているとはいえ、その大部分が自然の要素によって構成されているおおらかな丘のうえに突然現れた展望台は、コンクリートの塊から周囲を睥睨するだけの武骨で威圧的で無神経な存在だった。

僕たちはちょうどヘンゼルとグレーテルがお菓子の家を見つけたときのように、つないだままの手を強く握りなおして展望台へ入っていた。施設そのものの無神経さとは別に、もし昼間ならばここから街が一望でき、見晴らしは絶好なはずだった。しかし展望台は不況に打ち捨てられた多くの施設と同じように、幾多の荒廃と陰鬱を含んでいた。金に飽かして建造したものの利用者もなく、誰からもその存在を忘れられ、諦めに似たさまざまな悲しみや痛みが何年も前から石化したままその場所に沈着していた。

僕たちは展望台のテラスの、ペンキの剥げたパイプ手すりにもたれたまま深く長いキスをし、愛佳の薄いパンツを膝まで下げてセックスをした。彼女の荒い息づかいに伴って、彼女の薄いピンク色のドレスがリズムカルに、そしてまるで咲き遅れた馬酔木の花のように揺れた。まだ充分に夏になりきれていない6月の夜風が、二人の隙間に入り込んで愛佳から溢れた熱いものを冷やす役割を演じた。彼女は何度も繰り返し僕を求め、塞がらない何かを僕のからだで塞ごうと試みるようだった。

そして僕たちが抱き合ったままお互いの鼓動を余韻として感じられる時間が訪れたころ、夜はもう明けはじめていた。テラスのベンチで抱き合ったままの恰好で愛佳は少し眠った。自宅に帰ってないことやその日の午前にあるはずの企画会議のことなど、僕はすべてを頭の中から追い出して、ただ眠った彼女のからだだが風に晒されないうように、自分の上着をかけた背中を愛撫し続けた。

それからしばらくして、僕は空の明るみを今度ははっきりと感じながら、胸のなかで愛佳が泣いていることに気づいた。彼女は僕のタイを片手で強く握ったまま長い時間をかけて、熱い涙と溶けたマスカラとで僕のシャツの胸のところに文字を書いた。

しかし僕はその文字の意味するところが読めるほどにはまだ彼女を知らないという事実には愕然とし、彼女とさっきここでした行為が僕と彼女にとって何であるかを自分自身に問いかけた。

彼女は店のホステスであってそれ以上のことを僕は知らない。重複を恐れずに言うなら、僕たちは半年前に知り合い、休日にはドライブに出かけ、食事をし、映画を観てダーツを投げ、何度か短いキスをした。それだけだ。彼女のマンションの部屋番号も知らないし、正確な名前すら知らない。ただぼんやりとわかるのは、彼女には軽微的障害があるらしいということだけだ。

愛佳はたっぷり30分間、僕の胸のなかで泣いていたが、そっと顔をあげるとやっと口を開いた。

「ユウキ君、お仕事よね」

彼女がガスライトで最後に言葉をしゃべってからほぼ3時間が経過していた。

「ああ」

僕は愛佳にはほとんど聞こえないくらいの声で返事をした。

ほんとうはもう仕事に行く気なんてなかった。このまま携帯電話で会社に休暇の連絡をすればいいと思った。企画会議の社内プレゼンテーションをキャンセルしたとなると、口うるさい課長にあとから何を言われるかわからない。しかし急病だとも言えば、情状酌量の余地はまだ残されているだろう。幸いにしてその手はまだ使ったことがない。

「生まれたの」

愛佳はまだ涙の残る眸で僕を見つめて言った。

「生まれた？」

「うん。愛佳はいま生まれたのよ。ピヨピヨってね」

「たまごから？」

「うん」

彼女は静かに微笑んだ。朝日の中で彼女の顔が輝いて見えた。

僕は彼女の髪のを直してあげて、僕たちはもう一度長いキス

をした。

「じゃあ、もう行ってね」

くちびるを離すと、愛佳は僕の肩を押した。そしてかけていた上着を僕の両手のうえに乗せた。

「どこへ？」

「お仕事よ」

「ああ、その前に送っていくよ」

「ううん、いいの。ここでさよなら」

彼女はもう一度僕の肩を押した。

いくら考えたところで、僕のこと、僕が正しいことなのかどうかはわからなかった。僕は今まで、自分自身の存在をきわめて軽くしようと振る舞ってきたのかもしれない。

——人とのかわり合いで重大なことはなにもない。

——永遠にその時が楽しくあり続けられつまり人は永遠に幸せなのだ。

たとえばそんなふうに敢えて思いこむことで、いくつかの気乗りしない束縛から解放されることがある。そしてその場をうまく片づけてあらゆることを先送りにできる。問題は狭い納屋のなかに溢れかえった、「先送りにしたもの」の捨て場所をどうするかということ、捨ててはいけないものをそのなかからどううまく選別するかということだ。

ベッドの中でベランダに落ちる雨音を感じた。雨はお茶を飲んだり本を読んだりするために出している木のテーブルと椅子に当たって、梅雨初期特有のひどく繊細で思索的で湿った音を立てていた。その音はとても原始的なリズムや音程を伴って、人をうっとりさせ放心させるのに充分な何らかの魅力を備えているようだった。僕は今日が土曜日であることを頭の中でもう一度確かめて、純白のシーツのうえで寝がえりをうつと、ふたたび深い眠りへと落ちて行った。

☆ ☆ ☆

「アジアンタムは難しいのよ」

妻はそう言って眉を寄せていかにも難しそうな顔をした。この鉢植えはひと月ほど前に、街角の花屋で見つけて僕が買ってきたものだ。僕は観葉植物が好きだ。しかしただ囲まれて生活するのが好きだけでなく、実際にそれを世話するのは妻の役目だ。だから家の中には僕が無責任に買ってきたいろいろな観葉植物の鉢が、ざっと数えただけで28ほどある。彼女はその28に対して毎朝水をやり、葉や茎を点検し、肥料を補充する。それが好きだとみえて、彼女は特に文句を言うでもなくむしろ進んで引き受けている様子だ。

「難しいって、なぜ？」

土曜日の朝らしく、僕はパジャマのまま目覚まし代わりに濃く淹れたコーヒーを片手に、これから新聞を開こうとしているところだった。

「なぜだかは知らないわ。あなたはたとえば子供の世話が難しいのはなぜだか言えるの？ もし簡単な理由だとしても、それを知ることは自体に意味を持たないこともあるわ。とにかくこの種類は温度と湿度の管理がとても難しいの。ほら、ダメになった葉や茎を取って

いったら、こんなにポリウムが減ってしまったわ」

妻はわざわざ僕の目の前まで鉢植えを持ってきて、テーブルのうえに置いた。たしかにひと月前に買ってきたときの葉のつき具合と比較すると格段に貧相な印象を受ける。まるで洗いたての猫のようにみすばらしい。僕はこの植物の、霞のように細かい葉をたくさんつけるところを気に入って買ったのだった。それがこんなに寂しくなったのではあまり目的に合わない。

「根が弱いから水やりの加減が難しいし、頻繁にミストもしないといけないし、ベランダに出したり部屋の中へ入れたり、気温に敏感だから結構手がかかるのよ。あなたと同じだね」

妻は最後のひとことを言うためにアジアンタムを僕に見せた訳ではないだろうが、そう言っても差し支えないくらい、いかにも困ったという具合に手を腰に当てた。

「僕が？ 手がかかるって？」

「そうよ。あなたはとても傷つきやすいアジアンタムと同じよ。頻繁に構ってあげないとひとりでは生きていけないの」

「たとえば？」

「たとえば……ひとつひとつ例を挙げるのが嫌になるくらいよ」

彼女はそう言ってしばらくしてから笑った。

僕はアジアンタムの細い茎を指先で探り分け、仔細に葉の様子を眺め、検査を終えた技師のようにしかつめらしく頷いた。

「たしかに弱そうな草だな。特にストレスにはね」

妻の手のうえに鉢植えを戻すと、僕はふたたびコーヒークップを手にとって新聞に目を落とした。

紙面は直近の政局の状況を、飛躍や憶測のみで裏打ちされたバイアスたっぷりの論調で伝えていた。僕は軽く首を傾げては短いあいだに次々と別のページを開いていき、2分後には早くも諦めて新聞をテーブルのうえに放り出した。それらはどの記事も内容がひどく空虚で稚拙で芸能雑誌との違いを見つけられないほどの、決して5分とは我慢して読むことのできない代物だった。この新聞社に勤め

ている記者が、こんな仕事で給料をもらっているのだとしたらとても幸せだ。煽り、唆し、嘆き、憤り、読者には何が事実か決してわからず、その紙は大衆におもねるために真実を製造しているだけのただのパルプに過ぎなかった。

僕は気分を切り替えるために棚からパスカル・ロジェの盤を1枚選ぶと、中身を取り出してCDプレイヤーにセットした。雨の降る日に家に閉じこもっているのは好きだ。こんな日はつまらない新聞など屑かごに突っ込んで自分を世俗と隔離し、静かなピアノ曲でも聴きながら何もせずに過去のいろいろな想い出を反芻して一日を過ごしたほうがいいと思った。

エリック・サティのジムノペディなどはそうしたときに聴くものとしては最適だ。あのゆったりとしたテンポと音価の長い虚ろな音の響きは、自己の奥深くに眠るアンニュイな気分をうまく引き出したまま静かに穏やかに一日を着地できる。

僕はB&Wのコンパクトなスピーカーからゆっくりと流れる3拍子のD-durのメロディを聴きながら、この曲に限って言えば調律されたピアノで演奏しなくてもいいんじゃないかと思った。たとえば昔の回転が安定しないレコード盤のような、いびつで不整合な音のほうが、より陰鬱さがからだの奥に響いてくるような気がした。そして梅雨の初期に降る繊細で恥じらいを含んだ雨の情景によくマッチするように思えた。

☆ ☆ ☆

僕は308GTiのハンドルを握りながら、雨の休日に突然ランチを食べに行きたいと言い出した妻の気持ち理解できないでいた。彼女はゆるいウェーブのかかったボブにボーダー柄のロングTシャツ、ウォッシュ加工の短いデニムスカートといった格好だ。もとが童顔のこともあってか、基本的に若い女の子がするようなフアッションを好む傾向がある。おかげで年齢よりは5歳から6歳も

若く見られるのが彼女の自慢のひとつらしい。僕はそのころ31歳で彼女は僕より2つ下だったから、世間からは24歳前後に見られていた訳だ。

「チッコリーニ？」

僕が車にまで持ち込んだサティを聴いて、妻は前方を見たままそう訊ねた。

「いや、ロジェさ。ずいぶん違う」

僕も前を見たまま答えた。

「その違いを気にとめたいかどうかよ」

「その違いに気づくかどうかさ」

「こんなの聴いてて眠くならない？」

「気分が安らぐね。無謀運転の抑止効果があると思う」

実際ジムノペディには雨が似合うし、こんな日のドライブにかけていて悪くないものだ。レントの速度指示のあるゆっくりとしたワルツは、車を加速させるのにごく自然なテンポ感を与えてくれる気がする。それに、外界の音が遮断された静かな車内から雨の街を見渡したときのシアンを多く含んだ情景が、楽曲の悩み深く悲しげな描写とマッチしてどこか懐かしく記憶をくすぐってくれる。

「パスタがいいってこと？」と僕は訊ねた。

「そうね」と彼女は簡単に答えた。

「なんで今日？」

「梅雨明けまで待ってたら飢え死にしちゃうわ」

「パスタなら家に材料もある」

「あなたが作ってくれて、あなたが片づけてくれるなら、それもいいわね」

僕たちの生活のなかのあらゆるシーンは、そうやって彼女と僕の意見の対立で構築されていた。前にも書いたが、だからといって僕と妻の仲が悪いという訳ではない。それは対立というよりはむしろ《意見の確認作業》とでも表現するほうが正確かもしれない。

「今日はずっと引き籠っていたかったんだ」

「引き籠りは明日でも可能よ」

「明日もこんな調子の雨ならね」

この《意見の確認作業》は何かを始めようとするときの二人の決まりごとになっていた。その決まりは僕がつくった訳ではない。では彼女がつくったのかと言うと、そうでもない。二人が生きていきやすいように自然とそうなったという訳だ。

「ねえ、サティじゃないものをかけてもいい？」

妻は僕の顔を見て訊ねた。

「なぜ？ サティは好きじゃなかった？」

「あまりね」

「冗談？」

「ほんとうのことよ」

今度は僕が彼女の顔を見た。

「結婚して3年間気づかなかった」

彼女は《意見の確認作業》を通じて、僕に対して特に音楽の好みを伝えるようなことはなかった。僕がいつ何を聴こうと、それは彼女の思う意見を述べるシーンにはなり得なかった。なぜならば彼女は、音楽に対してまったくと言っていいほど興味を持っていなかったからだ。サティやチツコリーニといった固有名詞は、僕のライブラリーの中から彼女がみずから拾って覚えた言葉だ。

「ずっと黙ってたのよ。あなたに悪いと思って」

彼女がそういう言い方をするのも珍しいことだった。

「ちゃんと意見を言えればいいのに。ほかのことと同じだよ」

僕はそう言いながらプレイヤーのスイッチを切った。

車内にはタイヤが水をはじく微かな音と、ワイパーの音だけが残った。

「そうね」

妻はポツリとそれだけ言うと、サイドウィンドウから外を眺めたまま黙り込んだ。

それからおよそ5分後、僕はハンドルを左に切って街道沿いに以

前からあるイタリアン・レストランのガレージに車を入れた。

僕たちが入ったイタリアン・レストランは老舗だけどまったく気取ってない、常にどこかしら新緑の風が吹くような気分になぜされる誠実な店だ。この店は6月の梅雨の鬱陶しさがまるで嘘のように爽やかに店内を演出してくれる。エントランス脇のちょっとしたスペースにある大きな壺には常に新鮮な花がざっと活けてあるし、客席横の出窓スペースにはガラス製のオーナメントと季節の緑をうまく組み合わせたディスプレイが月替わりで置かれている。

僕たちが案内されて席につくと、この店ではおなじみのウェイトレスが注文を取りに来た。彼女は純白のシャツに黒のソムリエエプロンといったスタイルで、小麦色に締まった顔に小ざっぱりと短めにしたフェアリーショートの髪が印象的だ。

「本日のおすすめランチはフレッシュトマトとモッツアレラチーズの Pasta、それにソラ豆の冷製スープでございます」

そう言ってウェイトレスは綺麗に並んだ歯を見せて微笑んだ。

僕はすぐにいらないと断ったが、妻はひどく時間をかけて悩んだ末にやはり断った。そして改めてリストを見ながら、彼女はアサリとムール貝のヴェルミチェッリを、僕はアンチョビソースのブカティーニを、そして二人でバジルとオリーブの香りがとても爽やかそうな鯛のカルパッチョと海草のサラダを注文した。飲み物は彼女がソーヴェ・クラシコのグラス、僕がベルニーナのボトルだ。

「どうしてボルセックにしないの？」

彼女はウェイトレスが去ると、テーブルに両肘をついたまま言った。

「僕がボルセックを飲んだことがあるかい？」

「あら、なかったかしら？」

彼女は、目だけ上げて僕の顔を見た。

「ないね」

「以前はもっとエヴィアンのような硬水が好きだったんじゃないって

？」

「ずっと以前はね。人の好みなんて変わるものさ」

「そう？」

「たとえば君の髪型だって、結婚した当時は同じボブでももつと長かった。セミロングくらいにね。そしてもう少しボリュームがあつてオレンジ系のカラーを使っていた。でも今はそのころに比べて格段に短いし、ボリュームも抑え目で色はおとなしいブラウンだ。そうだろう？」

「女の髪型なんて流行と気分次第でいくらでも変わるものよ」

「そう、そのように僕の水の好みも流行と気分次第で変わってもおかしくはないよね。あのころはまだ硬水が好きだった、いまは軟水が好きだ、それだけさ」

「どうして軟水が良くなったの？」

「僕の水の好みなんてものが、そんなに気になるかい？」

「ええ、とつても」

「好き嫌いに理由なんてないさ」

「そうかしら」

「理由なんてないさ。もし簡単に理由がつけられるとしても、それを知る意味を持たないこともある。今朝君が言ったようにね」

僕はそう言つて彼女を見た。

彼女は目線をテーブルの上に落として軽く首を振り、やわらかにウェーブのかかった薄い栗色の髪を右手で少し掻きあげた。

「女の好みも理由なく変わるのね？」

彼女はひとりごとのようにそう言つた。その言葉は行き先を失つてしばらくテーブルのうえにうずくまり、そして二人のあいだに横たわつた。おかげで僕たち二人はほんのひと跨ぎの水たまりを挟んで向かい合っているようにも見えたし、決して跳び越えられない溪谷の両岸にいるようにも見えた。

「そんなふうに見える？」と僕は反対に訊ねた。

「そんなふうに感じるの」

「感じるとは？」

「そうね……」と彼女は地平線を見渡すように店内をゆっくりと見まわした。「たとえば新車のカタログが届いて、そろそろ展示場に出かけたくなったらどうする？ それと同じよ。あなたはいま、手元に届いたカタログを真剣に見てる状態なんじゃないかと思うの。いままで毎週土曜日にしてた洗車やワックス掛けが、いまは月に1度になってるって感覚よ。わかる？」

彼女はそう言って言葉を切り、僕の目をじっと見つめた。

しかし今度の彼女の言葉は僕の動揺を誘わなかった。僕は彼女の目を正面から見返すことができたし、顔色さえ少しも変わることがなかったはずだ。人は誰でも前もって予測できることに対しては、あらかじめ準備をしておくことができる。

僕たちはしばらくして運ばれてきたカルパッチョとサラダを食べ、パスタを食べ、飲み物を飲んだ。そのあいだ二人はずっと黙ったままだった。黙ったまま食べ物やフォークで口に運び、ときどき目を合わせてまたグラスの液体を喉に流し込んだ。二人のあいだにはお互いのものを噛む音や食器が触れ合う音だけがあった。

「でもそのこと自体については怒ってないわ。あなたが狩猟的すぎるか、私が農耕的すぎるかのどちらかよ」

食事が済んだとき、妻はたとえば看護師が外来患者に対して検査項目を説明するときのように、きわめて事務的に抑揚をつけずにそう言った。

「食事中ずっとそのことを？」

「ええ、いけなかった？」と彼女は口を拭きながら答えた。

「そうじゃないけど、食べ終わるまで待つこともないのに」

「わざわざ食事中に言うことでもないわ」

彼女は自分の手の甲を揃えて、すこしだけ眺めた。

サマセット・モームはこう言った。

「ライダー・ハガードを大衆作家といって軽蔑するのは自由だが、ハガードはプルーストが『失われし時を求めて』を書いたのと同じ情熱をこめて『ソロモンの洞窟』を書いたのだ。その情熱が大衆をうつのだ（開高健訳）」——と。そのモーム自身もやはりストーリー重視の大衆作家だった。

もちろん情熱だけで大衆作家になり得る訳ではないし、大衆作家の書いたものが必ずしも読むに耐えうる情熱を持っている訳でもない。たとえば大作家とは比較すべくもないが、僕が自分の受けたダメージや喜びや生きることの重みといったことを、読者にどういう形式で伝えるかは僕次第であって、読者がそこに情熱を感じるか退屈を感じるかもまた、読者次第だ。重要なことは形式ではない。

僕はこの断章のジャンブルを、自分の成長のためのひとつの句読点になればいいと思って書いている。それはこの物語の最初に言ったことだ。これらの文章のなかに、なにがしかの情熱を発見してくれる読者がいたら、それは僕にとってとても光栄なことだ。

物語を書くことは楽しいことだ。しかし文章を書くということは辛い作業だ。そういうとても常識的なことが、やっとな最近わかりはじめた。

☆ ☆ ☆

さまざまな心配事を納屋に放り込んだまま、まずは進んでみる。先送りにしたものをいつ捨てるかは、あとで考えてみることにする。

大学三年のとき、アルバイト先の不動産鑑定士事務所にいた女性事務員は、僕よりも4歳年上だった。彼女は他人にあだ名をつけるのが得意で、鑑定士の先生だろうが依頼人だろうが、誰にでも勝手に名前をつけてこっそりとノートに似顔絵なんかも書いていた。彼女によると鑑定士先生は「ニセ吉衛門」で、よく依頼に来る不動産屋は「お茶の水博士」、地裁の執行官は「バカ殿」であるらしかった。

彼女は先生が現地実査に出かけているあいだと先生が帰宅してしまったあと、自分のデスクで物件特定の資料を作ってる僕に向かって、ほとんどひっきりなしに話しかけてきた。彼女は僕の広げている書類をわざわざ向こうへ押しやってデスクのうえに腰かけ、長い髪が眼鏡にかかるのを気にしながら、ノートに書いた似顔絵を一人ひとり丁寧に説明してくれた。

「この人はほら、先週末た不動産屋のジイさん。鼻が大きくててっぺんまでずっと禿げてるところがさ、なんか手塚治虫のマンガに出てくる感じじゃない？ だからお茶の水博士って名前なの。それと、こっちは執行官よ。さっき先生と一緒に出かけたでしょ？ ちょっとバカ殿に似てくない？ あとは、これがウチの先生。吉衛門を思いつきり不細工にした感じ。ニセ吉衛門よ。どう、似てるでしょ？」

そう言って彼女は一人で声をたてて笑った。椅子に座ってる僕の目線から短いスカートの中が見えてることをわかってるのかどうか、彼女はまったく気にしていない様子だった。

「ぼくちゃん」というのが彼女が僕につけたあだ名らしかった。ずいぶんと屈辱的な命名だ。なぜかはわからないけど、ほかの人と違ってそこにはマンガや芸能人の要素は含まれていなかった。

「ぼくちゃん、いまから用事ある？」

アルバイトをはじめて1ヶ月後、公図と登記簿の閲覧のために二人で法務局へ行った帰りに、彼女は僕を食事に誘った。誰かにご馳走してもらった経験のほとんどない僕は、一にも二にもなく彼女についていった。彼女は食事の席で、事務所にいるときの3倍の量と速度で僕にしゃべりつづけ、僕のプロフィールを根掘り葉掘り調べ、満足そうに帰っていった。その後、彼女はしばしば僕を食事に誘い、2ヶ月後には飲みにも誘った。僕は太抵において腹をすかしていたので、ほぼ彼女の言うとおりにどこへでも出かけた。

「ぼくちゃんの彼女になっていいかな？ 年上の女とは一度くらいつきあってみるものよ」

彼女は飲むとそんなことを言って僕にもたれかかった。

そして3ヶ月後、彼女は僕を自分のマンションに誘った。そのとき僕はもう初めての体験ではなかったが、1年生のときに付き合っていた彼女とは違う大人のセックスを知った。彼女は僕がビデオや友人たちとの会話でしか知らないような恥ずかしい方法で夜通しリードし、僕は翌朝の電車で揺られて大学のキャンパスに向かう途中、苦しくなってきたまま心不全で死ぬのではないかと思った。

その後僕は、アルバイトのある日の夜はほぼ必ず彼女のマンションを訪れ、翌朝の電車でキャンパスへ通う日が続いていた。セックスにうつつを抜かしていたと言っていた。おかげで僕はアルバイトを通じて実務を覚え、果ては不動産鑑定士になろうという真剣な夢を無駄にした。

ある日、地裁の鑑定命令の事案で法務局へ地積測量図を閲覧に行った僕は、帰り道に薬局に寄ってコンドームを買い、電話ボックスから事務所に電話をかけた。思ったとおり彼女が電話口に出て、先生は会合があるから今日は戻ってこないと告げた。

「今夜も行くよ。いいだろう？」

僕はコンドームの箱を弄びながらそう訊ねた。

「今夜はダメよ」

彼女ははっきりした口調で言った。

「なんだよ、生理か？」

「違うわ。ぼくちゃんとの遊びはもう終わりなの」

「どういう意味だよ。年増の捌け口になってやったのは僕なんだぜ。あんたもいい思いしたんだろ？」

彼女はしばらくのあいだ電話の向こうで何かを考えているようだった。

「わかったわ。事務所に戻ってきて頂戴」

彼女はそう一方的に言うのと電話を切った。

僕が事務所に帰ると、彼女はひとりで背中を向けて、デスクに肘をついたままぼんやりとしていた。いつもより小さく見えた。

「どうしたんだよ、いったい」

僕は後ろから抱きしめて彼女の乳房をつかんだ。すると彼女は僕の手を抑えたまま、突然涙をこぼした。デスクの上に涙の粒がいくつも落ちていくのがはっきりとわかった。

「あなたに隠してたの」

彼女が僕のことをあなたと呼んだのは、それが初めてのことであった。

「何を？」

僕は彼女から少し離れて訊ねた。

「ほんとうは旦那がいるの。赴任先から帰ってくるの。突然のことよ。あたし、ねえ聞いて。あなたとは別れたくないの。ほんとうよ。でも、こうなっちゃったら……。ねえ、わかってくれるわね？」

彼女はとても早口にそう言ってしまふと、今度は声をあげて泣き始めた。

僕はまるで見知らぬ人から突然子守りを押し付けられたような気分になって途方に暮れた。そしてその場をどうやって終わらせようかと、しばらくのあいだ彼女の背中を見つめていた。僕は最初から彼女と「つきあってる」つもりなど少しもなかった。好きでもなんでもなく、情のかけらもなかった。彼女とセックスをしたのは、ただ性の捌け口として、目先の快感を得る手段として便利だったから

に過ぎない。いまここでこうやって彼女に大声で泣かれるのは、ひどく煩わしいことだった。

僕は不意を襲って、泣いている彼女を抱きあげてデスクのうえに押し倒し、下着を引きずりおろして思いを遂げた。彼女とのあいだで僕がリードしたのは、そのたった1度だけだった。そしてセックスの最中に彼女が僕のことを「ぼくちゃん」と呼ばなかったのも、それが最初で最後のできごとだった。

僕は使わなかった新品のコンドームの箱を、帰る途中に通りかかった鉄道の跨線橋のうえから思いっきり放り投げた。箱は取り立ててなんでもないほかの物たちを投げたのと同じように、あたりまえの放物線を描いてゆっくりと線路に落ちてとまった。何も知らない水色の電車が、まじめなサラリーマンたちをいっぱい乗せて、その上を通りすぎていった。それからアパートに帰ると、僕は二通の手紙を書いた。一通は鑑定士先生に宛てて突然事務所を辞めることになったお詫びを、そしてもう一通は彼女に宛てて事務所でしたことへの丁寧なお詫びを。

彼女への手紙の最後に僕はこうしたためた。

「誓って言うよ。今でも君を愛してる」

☆ ☆ ☆

彼女の名前を思い出した。「ナ・ツ・ミ」だ。

☆ ☆ ☆

『雨に唄えば』というミュージカル映画があった。父の父がまだ若かったころの人気映画だ。その中でジーン・ケリーは土砂降りの雨の下、タップを踏みながらこの映画の題名にもなった歌を唄った。僕は高校2年生のときにレンタル屋で借りたビデオを何度も観て、恋に心を輝かせるようなこうしたシーンが、自分に訪れることはま

ずないだろうと思った。それまでの僕の恋はすべて、陰鬱で胸がつまるような経験しかなかったからだ。しかしそれと同時に、一度で良いから彼のように熱に浮かれて、雨の中で踊ってみたいという憧れを強く持った。憧れというものは手に入れると一枚ずつ皮が剥がれ落ちるくせに、手に入らないと逆に分厚い皮で覆われはじめるものだ。

僕は、自分の抱いた憧れが女性に対してではなく、恋する自分の姿に対して向けられているのだということにも気づかず、まるでプールに釣り糸を垂れるように、対象のない恋愛を待ち続けた。

☆ ☆ ☆

ゲートが言っているとおり、何事につけても希望を持つことは絶望することよりもずいぶんいい。たとえそれが可能性のないことであって。

☆ ☆ ☆

霧のような細かい雨が音もたてずに降っていた。深呼吸をすると肺の中すべてが霧粒で満たされそうなくらい煙っていて、しかし軽い雨だ。

缶コーヒーを片手にしたまま机に腰をかけて、僕は窓の下を行き交う人たちをぼんやりと眺めていた。いろんな色の傘がやってきて、そして去っていった。ゆっくりやって来る人、急ぎ足で過ぎ去っていく人、速さもまちまちだ。しかしその傘の陰に見え隠れする人の顔は、意外なほどみな無表情だ。

彼らが通りすぎる道の一角に古びたアパートがあって、その二階から僕が道を眺めている。そして僕が彼らと関わる原因らしきものについては、それ以上の説明ができない。彼らは欲するところに拠ってこの道を通りすぎ、僕は眺めたいときにこの道を眺める。僕自

身の存在は彼らにとって存在しないこととの見分けがつかないくらいだし、彼らの存在も僕にとってまったく取るに足らない。お互いは没交渉であり疎結合であり、僕と彼らとのかかり合いで重大なものはなにもない。つまりそうしていられる限り、僕はその時々を楽しくあり続けることができる。こういう気分になったのはそう遠くない過去のことだ。

「あたしよ。誰かわかるかしら？」

「……」

「ナツミよ」

「……ああ、わかるよ」

「良かった、覚えてくれてたのね。嬉しい」

「たった数カ月で忘れるほどの薄情者じゃないさ」

「ありがとう。お手紙もらって嬉しかった。ひとことお礼が言いたくて」

「手紙？ ああ、あのことは悪かったと思ってるんだ」

「ううん、いいの。あんなふうにされて嫌じゃなかったわ。むしろ嬉しかった」

「嬉しかった？」

「たぶんあなたにはわからないと思うけど、女って男から乱暴に扱われたときがあるのよ。あのときのあたしがちょうどそうだった。すごく良かったわ」

「ところで、どうしてこの番号を？」

「事務所のアドレス帳からよ」

「そろそろ消したほうが良くないかな。僕はもうとくに辞めたんだし」

「そうね、そろそろ消さなきゃね。でも先生はアドレス帳なんて細かいことなど何も気にしないわ。わかるでしょ？」

「ああ、わかるさ。だから消すのはたぶん君の役目なんだろうね」

「この電話が終わったら消すわ。最初からそのつもりよ。ねえ、そ

れよりも今度一緒にライブに行かない？」

「ライブ？ 急にどうして？」

「友だちからチケットを2枚もらっちゃったのよ。来週の日曜日、トランスペアレント・モンキー・バンドよ。知ってるでしょ？」

「聞いたことない」

「ウィズ・ティアーズ・イン・ユア・アイズって曲知らない？ あんなに有名なのに。あなたはロックが嫌い？」

「場合によってはね」

「どういうこと？」

「僕が好きなのはグレゴリアン・チャントさ。すべての基本なんだ」「ふうん、まだ聴いたことないわ。グレゴリアン・チャントってきつとアメリカのミュージシャンでしょ？」

「そうかもしれない」

「どんな曲を出してたっけ？ 曲名を聞いたら思い出すかも」

「リサイテイング・トーン」

「知らないわ。ほかには？」

「セントニゼイションとか、ヘクサコルドとか」

「どれも聞いたことないわ。すいぶんマニアックなのね」

「そうかな」

「ねえ、それより、いまあたしが何してるか知ってる？」

「わからないな」

「オナニーよ。ぼくちゃん、あなたの声を聞きながらね」

「なぜ？」

「え？」

「なぜそんなことを？」

「ぼくちゃんの声が甘くて素敵だからよ。言ったでしょ？ あたしは男らしい低音には逆に魅力を感じないの。こうやってぼくちゃんの声を聞いてると、あのころを思い出すわ。からだの芯から痺れそうよ。ねえ、また会ってくれない？ だんなとはとりあえず上手くやってるわ。でもあいつにはもううんざりよ。わかるでしょ？ ぼ

くちゃん、あなたが欲しいの。ホテル代はもちろんあたし持ちよ。そんなこと心配させない。食事もよ。何でも好きなもの食べていいわ。もし今度のライブに行けそうだったらそのあと……」

「悪いけどもう電話しないでくれるかな」

「どうしたの？ いま何か急用でも？」

「何もないさ」

「じゃあ、どうして？ あたしのこと嫌い？」

僕は思い切り息を吸い込んでこう言った。

「大っ嫌いなさ、イロキチガイのメス豚め！」

通りすぎる人と雨があって、それを眺める僕がいる。雨は過去の記憶を鮮やかに甦らせるとともに、それをさっぱりと洗い流すことに目をつぶってくれる。高校2年生のときと比べて、僕はほんのわずかではあるけれど成長したのかもしれない。

凡そ生ける動物は汝等の食となるべし 菜蔬のごとく我これを皆
汝に与ふ (創世記9・3)

☆ ☆ ☆

僕が最初の客のようだった。

木製の扉が閉じる小さな音に気付いて、マスターは顔をあげて僕にいらっしゃいと声をかけた。彼は氷の板を前に置いたまま携帯電話でメールを打っているところだったが、カウンターのちょうど自分が立っている正面のところをタオルで軽く拭くと、ボール紙のコースターを素早く滑らせて、手のひらで僕を案内した。

「まだ早かったかな」

僕は座りながら詫びるように言った。

「大丈夫だよ、ドアが開いてりゃ」

「ずいぶん来てないよね」

「そうだね。いつだったか『カフェブリュ』のママがあんたに絡んで以来かな。あれはまだ6月だったから3ヶ月ぶりってとこだね」

マスターはレコードラックから何かを探す様子で盤を出したり戻したりして、やっと5枚目に見つけたらしく、慣れた手つきでプレイヤーにセットすると素早くそのうえに針を置いた。

「彼女は飲ませたら底なしだね」

マスターはジャケットをスタンドに丁寧に立てかけながら言った。

JB Lから聞こえはじめた声はジューン・クリステイの『ラウンド・ミッドナイト』だった。

「カフェブリュ？」

「うん、ちょうどその斜向かいの角を曲がったところにあったスナックでさ。いい店だったけど、8月に閉めちゃったんだ。惜しい

ことしたね。あたしが言っても仕方ないことだけどさ」

「ただ者ではないと思ってたけど」

僕がそう言うと、マスターは軽く笑った。

「口は悪いけどいい子なんだよ。37か38か、とにかく40歳はいつてない。ああいう花のある子はね、普通だったらパパがいて、その人に店の資金を出してもらったりするんだけど、あの子はずっと独りだったね。最後はお金が詰まっちゃったんだろうね。パトロンがいないとたいへんだ。寂しい終わり方だったよ」

マスターはそう言って、とても懐かしいものを思い出すように宙に目をやると首を振った。そして10オンスのロックグラスに5cm角立方体のアイスを1個だけ入れて、静かにウシユクベ・リザーブを注ぎ、マドラーで2回半だけアイスを回転させて止めた。

「マスター、悪いんだけどジュリー・ロンドンに替えてくれないかな？」

僕はマスターがつくってくれたロックに少しだけ口をつけたあと、レコードプレイヤーのほうを見ながら言った。

「おや、ユウキさんならクリステイだと思ったけどね」

マスターはそう言い、僕は小さく肩をすくめた。

「高校生のときに散々聴かされたんだ。床屋のオヤジが妙にジャズ好きでね。髪を切りに行くと、向こうはジャズの話がわかる客ってことで、手ぐすね引いてまってるのさ。月1回行くと必ずつ3回はジューン・クリステイの『ラウンド・ミッドナイト』を聴かされた。3年間かける12ヶ月かける3回さ。もういいかなって」

僕の話聞いてマスターも首をすくめ、レコード盤をジュリー・ロンドンにかけ替えた。そして出刃包丁で刃の筋目を入れて、目の前の氷の板をきっちり5cmの立方体に割りはじめた。

「彼女は最後まであんたのことを気にしてたよ」

彼は放っておくと、自分の気に入ったロックアイスができるまで、いつまでも氷を割り続けているのではないかと思うほど几帳面だった。

「一度会っただけなのに」

「あの子は年下の男の子が好きだからね」

その言葉を聞いて、僕はずいぶん昔のことを思い出した。

「ウィズ・ティアーズ・イン・ユア・アイズ……か」

そう言えば、彼女につけた名前はナツミだった。

「でも違うんだ」と僕は言った。

「何が？」とマスターは出刃包丁を持ったまま、僕の表情を確認するように目をこちらに向けた。

「そのあとにもう一度来てるんだ」

「そのあと？」

彼は仕事の手を止めて額にしばらく握りこぶしをあてて考えていたが、僕を見ると軽く笑みを浮かべた。

「そうだった。ずいぶん若い子とね。店に女の子連れてきたのは、あのときが初めてじゃない？」

「最初で最後かもね」

「かも？」

「うん……」

マスターはそれ以上を訊き出すことにためらいを感じたのか、話は何となくそれで終わりを告げ、彼はまた出刃包丁で氷に設計図を引く作業をはじめた。僕はジュリー・ロンドンのハスキーヴォイスを聴きながら、カウンターに頬杖をついてレーズンを囓んでいた。それぞれがそれぞれの持ち場に戻ったというところだ。

☆ ☆ ☆

もう0時を過ぎていた。僕は紙幣を何枚かカウンターに置くと、椅子から立ちあがった。その夜はめずらしく客の入らない日だった。マスターによると、たとえば雨がひどく降ってるといようなわかりやすい理由がなくても、こういうことは月に一度くらいはあるらしい。

「先月もボウズの夜はあったよ。べつに腐るほど特殊なことでもないんだ」

彼はステンレスのシンクを丁寧に拭きながら言った。

「最近はずっとこの調子？」

「あんたがここを見つけてくれた頃には、もう駄目になってたのさ。特にこの半年はひどい」

「どうしてかな」

べつにマスターに訊ねた訳ではない。ただなんとなくつぶやいてみた、そんな感じだ。しかし彼は少しのあいだ宙に解を求めるように目を泳がせると、やがて新しいロックグラスに氷を入れた。

「まだ時間があるなら、あたしが一杯おごるよ」

彼のことばに、僕は改めて椅子に座った。彼はグラスをイエローローズで満たすと僕に勧め、自分にも一杯つくった。

「きつとあんたのことだから、不況だとかそういう答えを求めている訳じゃないよね？」

僕は上等なバーボンの香りを楽しみながら、だまって頷いた。

「連鎖が崩れてるんだ」とマスターは言った。

「連鎖？ 植物性プラנקトンを動物性プラנקトンが食べ、っていうフードチェーンのこと？」

「客が嬢を連れてきて、その嬢がまたべつの客を連れてくるってやつ」

「なるほど」

「あたしのやってるような店は連鎖で成り立ってたんだ、いい時代はね。あんなにいい時代はもう来ない」

「そう？」

「この世界に25年いるんだ、鼻でわかるのさ。いいニオイはしてこないね。あたしは18のときに田舎から出てきてね、バーテンからはじめて、将来はなにかスゴいことをやってやる、なんて思ってた。でも気がついたら43にもなってまだバーテンでいる。若い頃は、歳をかさねたら自然と世の中のことをわかってくるもんだと思

ってたけど、そんなことはないな。25年かかって身についたこと
といえば、じょうずなロックアイスの割りかたぐらいのものさ。あ
んたはどうだい？」

「じょうずなサックのつけかた」

「だろうね。あたしもあんたも、生きてる世界は違うけど似たよう
なものさ。だとすれば、無理にスゴイことなんてしなくても、バー
テンのままで充分だってことに気づいたんだ」

「バーテンで悪いはずがない」と僕は言った。

「それに、仕事を楽しんで一生懸命に過ごしているあいだは、新しい
ことなんて考えないんだ。すくなくとも、あたしはそうだった。そ
ういうときは、同じ仕事のなかに毎日違う発見があるものなんだ。
そうだろう？」

僕は頷いた。

「あたしはそうやってずっと夢中で働いてきた。そして今から10
年前に、店の権利を買わないかって話が偶然舞い込んできてね。悪
い話じゃない。ある程度は蓄えもできてたし、自分で店をはじめて
みることにしたんだ。おかげさまで、何年かたつと固定客も増えて
きた。」

ほかじゃ知らないけど、あたしの店ではね、出勤前後の女の子を
ここに連れてきて遊んでく客が多いのさ。そしてたいていそうなん
だけど、そういう客はいずれ女の子を口説いたりすることを考えて
るね。あたしなんか今までにふられた男を何人見たかわかりやしな
い。ふられると確実に来なくなる。男のほうさが。ぎゃくに女の子
のほうは平気で、いずれまた別の男客を連れてくる。するとその男
客がまた別の店の女の子を連れてくる。だからいろんなドラマがあ
ったけれど、いい時代にはそうやってどこまでも繋がっていったの
さ」

「その連鎖が崩れた？」

「なんだろうね。以前のように男が女を食うシーンを見なくなった。
根っこのところはやっぱり不況って答えになるんだろうけど、みんな

な精神的に余裕がないのかもしれない」

「財布も軽くなってる」

「もちろんそれも大きいね。遊び方に余裕がないから、プロセスを楽しまない。一回断られたら諦めちゃうらしいよ。昔のように何度も店に通って口説きまくって、やっと落とすなんてことはない。それに今の女の子は落ちるのが早い。フィーリングが合えばあつという間にやらせるから、わざわざあたしの店に来て雰囲気をつくる必要もない」

「遊び方が変わったのかな」

「女の子がプライベートで会うことも、昔に比べてずいぶんと多いらしいよ。そんなことをしたら客はクラブなんかに来なくなっちゃうんだけど、今の女の子たちには店に対する忠誠心なんてないね。そういう意味では女も客をその場限りの男としてしか見てない。人と人とのかわり合いが希薄なんだ。たとえば大事にしなきゃいけない人であつてもね。それが今の風潮さ」

僕は皿に残った最後のレーズンを指でつまみあげると、すこし肩をすくめた。

「でも、かわり合いが希薄なほうがいいこともある」

「たとえば？」とマスターが訊いた。

「うまくは言えないけど、僕はずっとそうやって人とは疎結合で生きてきたんだ。いつも楽しくありたいからね。たとえば上辺だけの軽い男と言われても、他人との関係の深みにはまってくだらないことを深刻ぶって生きるよりは、ずいぶんハッピーでいいよ」

マスターは頷いた。

「わかるよ。ユウキさんらしいね。でも、あたしはくだらないことが好きだし、いつも深刻に感じていたいね。あたしのやってる商売なんて『くだらない』の最たるものだからね。スコッチやバーボンなんて飲まなくても、誰も死にやしないのさ。でもそのくだらないことの積み重ねでしか、あたしは生きていることの実感が湧かないもんでね」

☆ ☆ ☆

その後、一度だけ「カフェブリュ」のママを見かけたことがある。彼女はちょうど、僕の住まい近くのコンビニエンス・ストアから出てきたところだった。「ガスライト」で出会ったときよりもずいぶんと老けこんでいて、立ち襟のシャツではなく安っぽいトレーナーと踵のすりへったミュールが、生活に疲れた感じを漂わせていた。そして彼女はすれ違った僕に気づくことなく、妙に思いつめた表情のまま立ち去った。

花は咲きいずれ散る。

ただそれだけの、あたりまえのことが過去何千年、何万年、連綿と繰り返されていて、誰もそれを疑うことはない。花は咲き、いずれ散るんだ。僕が人とかかわりを軽くしておきたいのは、そうすることによって散った花を見なくて済むからだろうか。

「長いあいだどうしてたの？　もう消えたかと思ったわ」

「逃亡してたのさ」

「逃亡？」

「国外にね」

「出張とか？」

「まあ近いね」

「いいな、私も外国に行きたい」

「仕事で行く海外なんてつまんないよ」

「そうかしら？　日本にいるよりはずいぶんいいと思うわ」

「外国といってもいろいろあるからね」

「そうね、南国がいいな。嫌なことすべてから解放されそう」

「レイナは南の国が好き？」

「今は南の気分かな」

「僕は寒い国が好きだね」

「北欧でもいいわ。ほんとうはどこでもいいの。とにかく今は外国の空気を吸いたい気分よ」

「海外に行ったことないの？　新婚旅行はどこへ？」

「万座でダイビング。海外はまだないわ」

「今度ダンナにハワイでも連れてってもらえば？」

「無理よ」

「なんで？」

「離婚したの」

「！？」

「マジよ」

「……」

「どうしたの？　落ちた？」

「なんだか急な展開で驚いてる」

「でしょ？ いちばん驚いてるのは私自身かも」

「いったいどうして……って訊いちゃいけないのかな」

「でも訊かなきゃはじまらない」

「Exactly!」

「ずっとお話したかったのに、ステアさんはいつもオフラインだった」

「がっかりさせた？」

「うん。相談したいことがいっぱいあった」

「そうなんだ」

「いっぱい、いっぱい、聞いてほしいことがあった」

「ごめんね」

「ううん、いいの」

「怒ってる？」

「違う。もう、こうなっちゃったから」

「ほんとうに急なんだね」

「ほんとうに急よ。私自身、なにがなんだかわからないわ。まだ夢を見てるみたい」

「なにがいけなかったのかな？」

「わからない。ほんとうにわからないの。でもひとつ言えることは

……」

「なに？」

「結婚なんてしなきゃよかった」

「彼と？」

「ううん、誰ともよ。男なんて大嫌いよ」

「……」

「ごめんなさい」

「いいんだ。そういう気持ちになるのも無理はない」

「なんだか落ち着いて話せなくて」

「時がたてば戻るよ、きっと」

「そうかしら」

「そうさ」

「時間なんて結論を先送りにするためにあるんだわ」

「そうかな」

「そうよ。あなたが教えてくれた」

「僕が？」

「うん。私たちが知り合ったばかりの頃を覚えてる？」

「なんとなくね」

「あなたはこう言ったわ。『時間は問題じゃない。ロミオとジュリエットは、出会った瞬間に恋に落ちた』ってね」

「そんなこと、よく覚えてるね」

「あれは結論を先送りすることへの批判でしょ？」

「なるほど」

「あの頃のあなたは、しきりに私と会いたがったわ」

「そういうこともあったかな」

「ねえ。私は今、あなたと会ってもいいと思ってるの」

「正気かい？」

「あなたは正気じゃなかったの？ 冗談だった？」

「そうじゃないけど、君は今、冷静さを欠いているかもしれない」

「たしかにね。だからこそ直接会って話すの。お互いに目を見て話すのよ」

「いろんなことがあって自暴自棄になってやしない？」

「いけないかしら？」

「ううん」

「あなたって不思議な人ね」

「なぜ？」

「理由はないわ。ただ不思議な人って感じるの」

スクランブル交差点を渡りながら、レイナは不意に、人混みのなかで僕のほうを振り向いた。

「もう、こうしてリアルで会っちゃったんだから、ハンドルネームで呼び合うのもヘンよね」

すこしわざとらしく眉をひそめながら、雑踏のノイズに負けないようにそう言った彼女の声は、なぜか確信に満ちているように聞こえた。

「べつにヘンじゃないさ」

歩きながら言った僕の簡単な言葉は、彼女には届かなかったかもしれない。

やわらかな風が彼女の長い髪を少し持ちあげて、金色に揺らした。彼女はチャットで25歳だと言っていたけれど、風に揺れるピアスの耳元は、本人の申告よりすこし上に見えた。

「私、ユウコっていうの」

交差点を渡りきったところで、彼女は目の前にいたティッシュ配りのパフォーマンスを無視して、僕の顔を見上げた。まだ二人が出会ってから5分も経過していない。白いニットのワンピースから長めに伸びているペティコート風のフリルが、10月の日差しを受けて、とても清潔そうな明るさで輝いていた。

「ユウコ？ ゆうこりん？」

「キムラユウコよ。平凡でしょ？ レイナなんて柄じゃないわ」

「そうでもないさ。どちらもピツタリくる」

「チャットと同じで軽いのね」

そう言ってレイナはユウコはすこし笑った。

「軽いのは嫌い？」

僕はそう言った。

彼女はそれに答えず、ぼんやりと街路樹の枝ばかり眺めながら歩

いていた。そしてたつぷり3分間の沈黙のあと、彼女は突然立ち止まった。

「嫌いじゃないわ。ねえ、ステアさんは名前を覚えてくれないの？」
僕はとっさにどう答えればいいのか、わからなかった。

「聞きたい？」

そう口に出した瞬間、すこしばかり間抜けで無神経な自分のことばに僕は呆れた。

「聞かせてくれるならね」

彼女は持っていたバッグを後ろ手にして、ブーツの踵で重心をとりながら言った。

「ユウキっていうんだ」

「ユウキ……さん？」

「うん。ヨシユウキ」

「へえ、そうなんだ。ユウキとユウコね」

彼女は口をとがらせて、まじめな顔つきでそう言うのと、僕に背を向けてまた歩きはじめた。

「意外だった？」

僕は彼女に並ぼうとして、早足で歩きながら訊いた。

「なにが？」

「名前さ」

「じゅうぶん想定範囲内よ」

彼女は、まるで俳人が川縁を散策するように、周囲を見渡しながらゆつくりと歩いた。それなのに僕がなかなか彼女の隣に並べないのは、看板や自転車が置いてあって歩道が狭くなっているからだ。

「あの、どこへ行くつもりかな？」

僕は並ぶことを諦めて、彼女の肩越しに訊ねた。

「どこへでも行くわ」

「どこへでもって、どこ？」

「どこへでもって、どこへでもよ」

彼女は立ち止まらずに答えた。

「じゃあ、映画でも観る？」

「そういう時間の過ごし方、もったいなくない？」

「そうかなあ」

「映画なんてひとりで観ればいいものよ」

「だったら、ユウコ……はどこか行きたいところはないの？」

「ないわ。どこへでも行く」

「映画には行かないじゃない」

「映画以外よ」

「ダーツは？」

「やったことない」

「やってみればいいよ。きっと好きになる」

「食わず嫌いな。初めてのことが嫌なのよ」

「とりあえずお茶飲みながら考えようか」

彼女はそれには答えず、歩きながら、陽の光をいっぱいに浴びるように空を見上げた。そしてずいぶんとたってからこう言った。

「ふたりでお昼寝しませんこと？」

☆ ☆ ☆

ユウコのことばに僕は思わず立ち止まって、左右の靴の裏をゆっくりと確認した。

「どうしたの？」

彼女は不審そうに訊いた。

「僕の母親はしつけについて、ずいぶんとうるさかったんだ」

「どういうこと？」

「子供のころから、友人の家に遊びに行くときには、かならず靴の裏を確かめなさいって教えこまれたのさ。なぜって、もしガムを踏んでたら、他人の家の玄関を汚してしまうかもしれないからね。吐きだされて時間の浅い、新鮮なものほど危険だ」

「意味がわからないわ」

「たとえば行く先がホテルでも、やはり靴をぬぐ場所に対しては気を遣ってしまうんだ」

「それで、いま確かめてみて、どうだったの？」

「靴の裏のガムについてはオッケーさ。もつとも、最近はガムを道に吐きすてる連中も、そう多くはいないだろうからね。でもどうしたとか、靴下に穴があいてるようなんだ。親指の先だけ冷たい感覚って、わかるだろう？ 穴のあいた靴下ほどみっともないものはないからね。そんなものを他人の目にさらすことなんて、思いも寄らないんだ」と僕は言った。

「つまり私の提案は却下されたってことね」

そう言って、ユウコは首を振った。

「なんて言ったらいいのかな。僕の母親はこうも教えてくれたんだ。夢のなかで食べるビフテキでは、決してお腹は満たされないんだってね」

「ビフテキって？」

「出会ってから30分とたっていない男と寝ようなんて、健全な女性だったら考えもしないさ。チャットで話してくれた以上のことは僕にはわからないけど、もし君が身の上に起こったことで投げやりになっているのだとすると、いつか君が普通の状態に戻ったときに、夢の覚めた僕は逆にひどく憂鬱になってしまうだろうからね」

「ずいぶんとお母さんに従順なのね。でも、女に恥をかかせちゃいけないってことは教わらなかったの？」

「母親は僕が高校生のときに死んじまったんだ。それからは父親が代わりに僕の教育をした。父親はよく冷えたシャブリと鮭の燻製が大好きだったし、ワインの扱い方については毎晩のように食卓で蘊蓄を傾けていたけど、女性の扱い方については終生、黙して語ることはなかった。だから半径1メートル以内に女性が近づくと、僕はいまだに興奮してまともな会話ができないのさ」

僕はそう言って胸に手をあてた。

彼女はおかしそうに笑ったあと、乱れた前髪を右手で直した。

「ごめんなさい、一瞬はあなたと会ったことを間違いだったと考えたわ。でも、あなたが思ったとおり不思議な人だってことを確かめられただけでも、今日は収穫だったわ」

そう言うのと、彼女はまるで胸の中から厄介者を追い出すかのよう
に、深く長い溜息を吐いた。

☆ ☆ ☆

それから僕たちは、ユウコが目指していたらしいホテルのある丘
の、白い壁のトラットリアで遅いランチを摂った。食事のあいだ、
彼女はボロネーゼソースのラザニアをフォークの先でつつきながら、
窓から街をぼんやりと眺めていたし、僕は生ハムとトマトのパニー
ノを頬張りながら、ひっきりなしに着信するメールの確認に追われ
ていた。つい半月ほど前に買った新しい携帯電話は、なにをするに
しても僕の直感が及ばないほど、複雑な操作が必要だった。

「奥さんから？」

彼女は右手で運んだフォークの先を唇に挟んだまま、たまりかね
たように僕の手元に視線を落とした。

「オークションから通知がくるのさ。僕より高い値をつける人がい
てね。今ちやうど競り合っているとこなんだ。なにを落札しようと
してるか気になる？」

「べつに」

彼女の声には、ほんのすこしの安堵と、ほぼ同じだけの分量の不
機嫌なトーンが含まれていた。「しいて言うとなれば、初めてのデ
ートでそれほど携帯に熱中してる男性は、そう多くないと思うわ」

僕はパニーノの最後のひとくちを頬張ると、紙ナプキンでできる
だけ丁寧な手を拭き、ブラッドオレンジのジュースをすこし飲んだ。
「ねえ、僕たちは始まったばかりだし、まだまだ時間がある。そう
だろう？」

「私は特に変わったことを言ってる訳ではないわ。食事のときくら

いは相手と話すものよ。たとえふたりに100年の時間が保証されていようともね」

彼女はカプチーノをシナモンスティックで掻き回しながらそう言った。僕は軽く頷いた。

「たしかにそうだね。ではなにか話そう」

「なにを話してくれるの？」

彼女は僕の目をじっと見た。

「ギリシアの哲学者の話をしようか」

「どんな話？」

「昔、ギリシアにゼノンという哲学者がいたんだ。彼が提示したアキレスと亀のパラドックスは有名だね。いくら足が速くても、アキレスは永遠に亀に追いつくことができないって話。そのゼノンという人、好きな人がいたんだ。相手というのがクレモニデスという美少年でね、じつは男色の趣味があったんだな。ところがクレモニデスが向こうからやってくる、ゼノンは決まって隠れてしまうんだ。好きで好きで仕方がないのにね」

そう言って、僕はジュースを飲んだ。

「それから？」

「それだけさ。君もなにか話してよ」

彼女は右手にシナモンスティックを持ったまま、空いている左手で前髪を掻き上げた。

「さっきも言ったけど、あなたは不思議な人だわ。不思議と言うより、変わってると言ったほうが適切かもしれない。会うまではそれほど積極的だったのに、会った瞬間にとても消極的になってる。それも、わざわざ私に嫌われようとしてるみたい。そういう人を見ると、女としてどう感じると思う？」

「わからないな」と僕は言った。

「答えはひとつしかないはずよ」

彼女はすこし顔を上気させて言ったけれど、僕はそれについて返事をしなかった。

二人のあいだに、新たな沈黙が横たわった。

☆ ☆ ☆

「私、ほんとうは28歳なの。初めて見たときに、25歳じゃないなってわかったでしょ？」

しばらくの沈黙のあと、ユウコは思い詰めたように言った。もうフオークもシナモンスティックも持っていないくて、両手を行儀よく膝のうえへ重ねていた。

「インターネットで知り合った人と、現実に出会うことなんてないと思ったのよ。それに、誰だって実年齢よりすこしは若く言ってみたもののじゃない？」

「そうかもね」と僕は言った。

「がっかりしたでしょうね。悪かったと思うわ」

「なぜ？」

「なぜって、あなたは25歳の女に出会うつもりで来たのに、普通なら怒るでしょう」

「そんなことなら平気さ」と僕はテーブルのうえにこぼれたパン屑を手で集めながら言った。「年齢のことなんてたいした問題じゃないさ。それに」

「それに？」

「君は君自身が思ってるほど歳くって見える訳でもない」

「そう？」と彼女は言い、前髪を直した。「ありがとう。でも、もしそうだとしたら、そもそも私はあなたのタイプじゃなかったってことよ。そのほうが私にとっては致命的かもしれない」

彼女はそう言って、自嘲するように軽く笑った。

僕はテーブルに頬杖をついて、あらためて彼女の顔かたちを点検した。薄化粧の淡泊な瓜実顔に、三白眼だけど清潔そうな目元が印象的だ。鼻は高すぎず低すぎず、どちらかというと華奢なつくりだ。ラザニアを食べてカップチーノを飲んだあとの裸の唇は、処女のような

に薄い桃色に光ったまま、控えめに盛り上がっている。

「ねえ君、僕は君がリーディングの能力を持っているとは聞いてなかったし、もしそういうことに自信があるんだとしたら考え直すべきだと思うよ」

「意味がわからないわ」

「僕には君の言うような決まったタイプなんてないし、僕が君を気に入ってないという、君の勝手な分析については、まったく当たってない。僕にとって君はユウコではなくて、あくまでもネットの向こう側のレイナであって、ときどき会えたらすごく嬉しい存在なんだ。こうしてそばにいてランチを食べたり表情を眺められたり、直接話ができるだけでも、ほんとうに夢の国にいるようなんだ」

「それは私も同じよ。私だって自分がダンナと別れてこんなことをしてるなんて信じられない。夢のなかにいるみたいよ。夢の国と言うなら、ふたりは同じだと思うわ。それならなぜ……」

僕は首を振った。

「ふたりの言う夢の国が同じ場所にあるとは思えないし、すくなくとも僕たちは共感し合っていない。僕はそんなからだの関係を望んでないんだ。滑稽に見えるかもしれないけど、そういうことなんだ」

「普通の男は、やれると聞いたら喜ぶわ」

「だろうね」

「たしかに私は、普通の精神状態ならあなたに会ってすらないと思う。今日の行動はバツイチを記念した冒険よ。しかも、私にはあなたと違って、好みのタイプはあるの。あなたは残念ながら、私のタイプではないわ。でも、自分のなかから今までの自分を追い出すには、かえってちょうどいいと思った。たぶんダンナとの亀裂も、自分では気づいてない今までの私の、嫌な部分が原因だったかもしれないから。だからあなたと会った瞬間に、今日は自分に対して思いっきり暴力的になって、自分を変えてしまうきっかけの一日にしたいと思った」

彼女はすこし目の周りを赤く染めた。

「今日なにかを決着しなければ、君がどうにかなるという訳じゃないんだ」と僕は静かに言った。

「そうね」と彼女は答えた。

「じゃ、やらなくて良かったね」

「うん……」

それから15分間、ユウコは目にハンカチを当てて、ちいさな声で泣いた。なにを思い出して泣いているのかはわからなかったけれど、今日のこともすこしは涙の成分に含まれていたのかもしれない。

■ 12

「昨日はありがとう」

「こちらこそ」

「私、ユウキさんに謝らなきゃいけないことがあるの」
「年齢のこと？」

「違うわ。あなたは私のタイプじゃないなんて、失礼なこと言っちゃった」

「どうってことないさ」

「優しいのね」

「優しい？ そう言われたのは初めてかな」

「ゼノンのあのお話、続きを聞かせてよ」

「あれには続きなんてないんだ」

「ウソ」

「ほんとうさ」

「きっと続き話があるのよ」

「ない」

「ユウキさんはどうなの？」

「なにが？」

「好きな人を見かけると隠れるタイプ？」

「あまり人を好きになったことがないんだ」

「それもウソよ、きっと」

「なぜ？」

「奥さんだっているじゃない」

「そうだね」

「奥さんのこと好きじゃないの？」

「そんなふうに考えたことがない」

「なぜ？」

「わからないな。でも僕は……」

「聞きたいわ」

「誰かと一緒にいることにストレスを感じるんだ。その人が大切であればあるほどね」

「そう？」

「だから独りでいるか、むしろ大切じゃない人と一緒にいたいことのほうが多いかな」

「孤独癖？」

「ストレスがないほうが長生きできるよ」

「昨日テンションが低かったのは、ストレスを隠してたから？」

「そうかもしれない」

「やっぱり、長生きしたい？」

「死について共感できることが、まだすくないからね」

「私は元ダンナより長生きしたいわ。悔しいから」

「そういうモチベーションもありだと思うよ」

「ねえ、へんなこと言ってもいい？」

「へんなこと？」

「私、ユウキさんのこと嫌いじゃないわ」

「光栄だね」

「あなたは？」

「レイナは好きさ」

「ユウコは？」

「さあ。考えたこともないな」

「そうよね。そういうものよね」

「そういうものさ」

ユウコと出会うよりずいぶん前のことだが、僕は『愛すべき復讐者』というミステリー小説のようなものを書いたことがある。400字詰め原稿用紙で120枚程度の短いものだ。

☆ ☆ ☆

記憶をなくしてしまっている主人公は、べつの男と人違いされたまま、ある女から延々と付け狙われる。いろいろな手を使って何度も殺されかけた挙げ句、最後は車で轢き殺されそうになり、男が危うく避けると、女はそのはずみで自損事故を起こしてしまい意識を失う。仕方なく自宅マンションへ連れ帰って看病しているうちに、女は次第に心を開き、男によく似た犯人にレイプされ恋人に婚約を破棄されたという陰惨な体験を語りはじめ。そして今まで人違いしていたことを男に謝る。やがて二人は心を寄せ合い、共に暮らしはじめ、近い将来の結婚を誓う。しかし一夜、女は男の持ち物からある重大な事実気づき、うっかりとそれを口にしてしまったことから、主人公の男に殺されてしまう。

☆ ☆ ☆

物語というものはある程度の類型化が可能だ。僕も先人たちのいくつかの仕事をお手本に『愛すべき復讐者』を書いてみた。このストーリーは復讐者が一種の入れ子になっていることが特徴だ。主人公の男は、ラストシーンでどしゃぶりの街へさまよい出ていって、『雨に唄えば』を唄い踊る。僕の小説執筆という行為は、概ねにおいて、頭のなかに浮かんだ映像を文章化していくことに等しい。

しかし結局のところこの小説は誰にも読まれることなく、僕自身の手によって消去された。当時僕はまだ今よりは多少若く、性犯罪が被害者に与える深刻な痛みについて、まったく理解していなかったと言っている。小説作法の大半は技術論として考えられるが、良い小説の条件はもちろんそれだけではない。たとえば小学生の唄う演歌が聴衆の心を動かし難いように、キエチーフに裏打ちされない上辺だけのストーリーが、多くの読者の共感を得ることはないだろう。

いま同じ小説を書いたら果たしてどうなるのか、時々そういう考えに行きあたることもある。しかし僕が思いつく限りで言うなら、そういうことに思考を巡らせる行為は、たぶん時間の無駄でしかない。3年前に料理し損ねた仔牛を惜しんでみたところで、そいつはもうとつくに誰かの胃袋に収まっているだろう。そういうことだ。

繰り返して言うが、あのころを思い出し、今と比較することは、人間が成長するための一歩だ。3年前のレシピを横目で見ながら、市場で買ってきた新しい肉とコショウを鍋へ。僕がいま書ける物語とは、せいぜいそういったものでしかない。

気持ちのいい土曜の朝だった。僕はソファに深く腰を降ろして、開け放したベランダの掃き出しから入ってくる風に白いレースのカ―テンが揺れるのを眺めながら、ビル・エヴァンス・トリオの『ワルツ・フォー・デビー』を聴いていた。僕は4分の3拍子のリズムが好きだ。そうひとことで言い切ってしまうにはすこし正確さに欠けるけれど、概ねにおいてそれは正しい。

☆ ☆ ☆

『ワルツ・フォー・デビー』――ビル・エヴァンス・トリオのアルバム・タイトルにもなっているこの楽曲は、当時のまだ幼いビルの姪に捧げられたもので、柔らかく明るくそして可愛らしい曲だ。このアルバムでは、スコット・ラファロのベースの秀逸さが目立つと言って良い。しかしラファロはこの録音の11日後に交通事故で死んでしまう。まさか何日か後に片腕ラファロを失うことになるとは、誰だってこの録音の段階では100%想像すらしていなかったはずだ。

仮にそれを人の命に限定しなくとも、なにか未来のことを予見しようとする試みは、僕たちが人間である以上、その多くが無駄で虚しいものとなってしまうに違いない。太古、人間にとって神々がまだ今ほど遠い存在でなかった時代、好奇心からパンドラがあけてしまった箱に唯一残されたものが未来を予知する能力だからだ。人間は未来を予知できないおかげで、生きるための希望を捨てないでいられる。

☆ ☆ ☆

リビングに座っている僕のまわりには、籐のラックに乗って観葉植物がずらりと並んでいて、並べきれないものはリビング・テーブルのうえにまで載せてあった。夏前には28個あったはずの観葉植物の鉢植えは、ていねいに数えなおすとすでに23個に減っていた。彼らのなかには、丈夫そうに思えるものでさえ、夏をすぎて根が傷んだり葉が枯れたりしてだめになっていったものがあった。そのなかで、6月には危機的な状況に陥っていたアジアンタムが、意外なことにすっかり甦っていた。

5個の鉢植えが枯れ、アジアンタムが蘇生の途をたどるそのあいだ、僕は自分自身がなにをしていたのかよく覚えていない。この家にいてこのリビングのこのソファに沈み込んでいたかもしれないし、ガスライトでガラスの縁を舐めていたかもしれない。しかし僕がどこでどう生きてようと、5個の命は現に失われ、アジアンタムは確実に回復していた。

もし枯れることを知っていたなら、妻は彼らに水を与えることをしなかっただろうし、毎日の点検すらしなかったはずだ。もっと遡って言うなら、僕がその5個の鉢を花屋から買ってくることはあり得なかった。予知能力を持ち合わせないおかげで、妻は彼らに対して努力をやめなかったし、僕は毎日を気楽に刹那的に生きていくことができた。

僕は青々と甦ったその葉や茎を眺め、そしてコーヒーを飲んだ。

「夏前にはずいぶん弱っていたから、もうだめかと思ったら」と僕は、ソファの隣にある籐のラックのうえから、アジアンタムの鉢を取り上げて言った。「買ってきたところと同じくらいたくさん葉っぱがついてるね」

妻は広いリビングテーブルの反対側の椅子に腰掛けて雑誌をめくっていたが、顔をあげて僕を見た。

「君の腕も相当なものだ」と僕はつぶやいた。

「私の腕？」

妻はなにか聞き慣れないことばに遭遇したときによくやる仕草で、

眉を寄せて瞬きをした。

B & Wのコンパクトなスピーカーから流れる「ワルツ・フォー・デビー」は、次のテイクに移っていた。

「そのかわり、いくつかの鉢をだめにしたわ」

彼女はそう言って、また目を落とすと雑誌をめくりはじめた。女性向けのファッション雑誌だ。そしてしばらくパラパラと眺めたあと、テーブルのうえに閉じて髪を掻きあげた。

「そのアジアンタムがどうかしたの？」

「いや」と僕は細かな葉を眺めながら言った。「こんなふうにうまくいくとは、思いも寄らなかったからさ」

妻は右手を口元にやると軽く笑った。

「私と家のことはすべて思いも寄らなかったんじゃない？ そのソファに座ること自体、ずいぶん久しぶりのはずよ」

「そう？」

「きっと、私とこうやって会話することもね」

僕はソファの背もたれにしばらく頭を載せて、彼女とした最近の会話について思い出してみた。

「そんなことはないさ。昨日だって食事をしながら、タイ王国についていろいろと会話したじゃないか」

「ああいうものを会話と？」

「なぜ？」

「タイの面積は日本より広いとか、首都の名前は世界でいちばん長いとか、昨日はあなたが一方的に話したんだわ」

「なにも話さないより、ずっといいさ」

「一方的に知識を披露することを会話と呼べるかしら」

「たしかに」

「なぜタイに興味を？」

妻は右側のえくぼのところすすりだけ皺をつくりながら僕の間を見つめた。

「べつに。話題以上のものはなにもないんだ」と僕は言った。

「そう。てつきり新車の試乗にでも出かけるのかと思ったわ」

「新車の試乗？」

「そうよ、タイにね。私に飽きて新車に」

彼女は肩をすくめた。

「君の言いたいことはわかったよ。でも君の言葉が常に真実をあぶり出してるって訳でもないのさ」

「そうかしら？」

「そうさ。タイ王国について言うなら、僕はあの国に行ったこともないし、行こうと考えたこともない」と僕はカップのコーヒーを飲みながら言った。「それに……」

「それに？」

「僕が話したことはたしかに会話と呼べないだろうけど、君が毎朝のようにつぶやく卵の鮮度についての分析と、毎週のようにつぶやく回転式掃除機の価格に関する批判だって、僕のつまらない蘊蓄とそう大差はない」

彼女は諦めたように笑いながら首を振った。

「私のつぶやきは、どちらもあなたとの生活に関係することよ。タイの話とは次元が違うもの」

「次元なんて大袈裟に言うほどの違いはないと思うよ。どちらも取るに足らないことさ」

「つまり夫婦関係って、お互いのそういう取るに足らない言葉の寄せ集めで成り立ってるってことね。これが夫婦だと言えるほど決定的ななにかを、残念だけどまだ見つけられないわ。三年以上も一緒に暮らしてるのに」

「もし三年で夫婦はこうだって結論めいたことが言えるとしたら、そのあとの膨大な月日がつまらないじゃないか」

「そうかしら。女は早く安心して暮らしたいものよ」

「そうなるかとぶん老けるのも早いね」

「だからさっきもいったとおりよ。お互いのそういう取るに足らない言葉を、笑顔で受け流していればいいんだわ。あなたと私の意見

はなにも噛み合わないけど、夫婦だからってなにかを噛み合わせる必要もないし、お互いの重要な話題を避けてきた。核心のところをね。けれど、こうやって二人の時間は自動的に過ぎていく。歳を重ねていく。きっとそれで充分なんだわ」

「それでいいということ？」

「いいえ、それを受け入れなきゃいけないってことよ。私がね」

レースのカーテンが揺れて、秋の乾いた風が二人のあいだを通りすぎた。

☆ ☆ ☆

この気持ちのいい土曜日は、思い出したくない出来事の起こるわずか72日前だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1315q/>

アズ・イフ

2011年10月8日06時05分発行